

荒哲著

『日本占領下のレイテ島
——抵抗と協力をめぐる戦時下フィリピン周縁社会』

(東京大学出版会、2021年)

評者 内山 史子

日本占領下の東南アジアに関する研究は、世界的に研究の蓄積が比較的厚い分野である。日本においては、政治、経済、社会、文化といった様々な視点に基づき、地域に焦点を当てた精緻な議論による国ごとの政治構造の「断絶／連続」の解明や、占領地で実施された文教政策の地域横断的な検討などがなされてきた(倉沢 1997; 前川 2009)。フィリピン史研究においては、日本占領前後で政治エリートが人的に連続した一方で、少なからぬ貧困層や戦前からの「反米」勢力は「対日協力者」として戦後のフィリピンにおいて周縁に追いやられたという理解が概ね定着していると言えよう(池端 1996など)。

これに対して本書は、「レイテ島という『周縁』における下位中間層以下の住民あるいは大衆」(p.5)に着目して、日本占領に対する住民たちの対応や占領下の住民同士の関係を、日本・米国の資料およびレイテ島住民へのインタビューに基づいて論じる。とりわけ著者は、「下位中間層並びにそれ以下の階級で経済的貧困にあえいでいる層の役割」(p.12)に焦点をあて、日本占領下の一地方社会の姿を包括的に描き出そうとしている。

本書の構成は以下の通りである。

序章

第1章 戦前期のレイテ島社会

第2章 日本占領の始まりとゲリラ組織化をめぐる暴力

第3章 町村部における日本占領と住民間暴力の激化

第4章 経済をめぐる住民の動き

第5章 戦争終結後のレイテ島の社会変化

終章

上述の通り、フィリピン史研究では、アメリカ植民地期に確立した政治エリートの支配構造は、日本占領下で抗日闘争と対日協力の双方にまたがり、抗争と離合集散を経て占領後も概ね継続したと論じられてきた。そのことは、州(地域)を地盤とする国政レベルや州の上位レベルのエリート層に顕著である。これに対して著者は、占領下の政治的動きの中で貧困層に属する「大衆」に何が起きたのかを明らかにしようとする。そして、レイテ島においては「下位中間層」の中から、抗日ゲリラの指導者あるいは対日協力の首長として権力を握り、「階級上昇」を果たした者たちがいたことを詳細に跡付ける。以下ではまず、本書の内容を紹介する。

レイテ島における占領下の動きの前提として、第1章では占領前のレイテ島の「周縁」と

しての位置付けが示される。植民地経済を支える重要資源や輸出品の産出が少ないレイテ島は、植民地期において「貧しさ」に特徴づけられる。そのような「周縁」においてアメリカ植民地期に確立された政治構造の特徴は、著者によれば、国政レベルのエリートや地方政治を牛耳るエリートも台頭したが、とくに地方エリートが反米意識を共通の経歴としていた点にある (p. 37)。また、アメリカ植民地初期には、宗教的な民衆運動 (ブラハン運動) による抵抗の歴史を持っていた。

第2章では、レイテ島の主要な抗日ゲリラ組織間の対立が描かれる。一つはレイテ島出身の軍人カンレオンが率いるLACで、正規兵の多くは比較的裕福な地元のエリートであった。もう一つはイロコス州出身で陸軍士官学校を卒業し、フィリピン警察隊およびユサツフェの将校であったミランダ率いるWLGWFである。このメンバーには下位中間層や貧農も多く、抗日活動の傍ら、農民たちに食糧を供給し、子供たちには教育を提供するなど、「独自の政治領域」を形成して貧困層の支持を得た (p. 81)。しかしながらこれは既存秩序に対する脅威と見なされ、WLGWFはやがて米軍と、米軍に公認されたLACの攻撃対象となった。

続く第3章では、いくつかの町村の事例を取り上げて、地域社会の権力関係や人間関係に根差した対日協力の様相が詳述される。占領初期には多数の抗日ゲリラや自警組織が結成されたが、それらに参加した住民には現金はほとんど支給されず、貧困層を中心に対日協力を転じる者が続出した。日本軍の側も、社会格差が著しいレイテ島ではわずかな支援で貧困層を対日協力に動員できると考えていた。また、反米思想に基づく町政を行う町長などを日本軍は支持し、治安対策に動員した。そうした状況下で、日本軍管理下の警察組織などに多くの農民らが参加し、抗日ゲリラの粛清やスパイの摘発などに関与した。この背景には抗日ゲリラの収奪に対する嫌悪感や怨恨、戦前からの根強い反米思想などがあったと著者は指摘する。戦前から続く地域社会における敵対関係も絡み、対日協力の様相は一様ではないが、総じて住民間の暴力は激化した。

第4章では、日本軍の物資や労働力の調達方針の下で蓄財に成功し、新興エリートとして台頭した人々がいたことが論じられる。前章に続き、膨大な資料やインタビューに基づき、占領下の地方社会において何が起きていたのかが詳述される。混乱した現地経済の中で、物々交換をベースに物品を集めて利益を上げたり、日本軍への物資納入を暴力的に独占したりなどして貧困層からの上がった者たちがいたが、物資調達の暴力化は住民間の遺恨や亀裂をもたらすことになった。また、日本軍と抗日ゲリラへ双方への「二重調達」を強いられた町村長など、占領下の生活もまた「反日／反米」で単純に切り分けられるものではなかった。

第5章は、レイテ戦直後から戦後初期にかけてのレイテ社会の変容を、階層構造の動向から論じる。レイテ戦を経て米軍が復帰すると対日協力者の捜査が行われ、多くの住民が国家反逆罪で拘束された。しかし、旧来の上位エリート層や町村部の中小エリートは法廷戦術を駆使したり、証言者に証言内容を変えさせたりして、多くは有罪判決を免れた。また、フィリピン政府の方針により、占領下で日本軍政に従った首長たちは多くが恩赦の対象となった。その結果、旧来のエリートは終戦後も戦前と同様の社会的地位にとどまった。

この過程で、貧困層に寛容だった中小エリート層が上位エリート層に吸収される傾向が顕著になったと著者は述べる (p. 180)。その一方、レイテ島で特筆すべき点は、下位中間層の中から日本占領を経て新興中小エリートになった者たちが少なからずいたことである (p. 221)。しかしながら、抗日ゲリラ・対日協力組織どちらに参加したかを問わず、貧困層の多くは裁判において有罪判決を受け、貧困から這い上がることはなかった。さらに日本軍管理下の警察組織などで活動した者は、終戦後に激しい憎悪とリンチの対象となった。

終章において著者は、「体制側にとって脅威となる暴力」を「山賊」と見なす認識がアメリカ植民地期から日本占領期まで続き、抗日ゲリラであってもWLGWFは「山賊」、米軍統制下のLACは「ゲリラ」と認識されたことを指摘する (p. 236)。ただし、「山賊」であろうと対日協力した町村長であろうと、エリート層は戦後もその地位を保持し、貧困層のWLGWFメンバーは公認ゲリラが戦後に受け取れた給与も受け取れず、レイテ島のエリート支配の構造は変わらなかったと著者は結論する。そのような社会において、戦後は、「同胞」の間で横行した暴力について多くの人々が沈黙した。

以上を通して本書は、植民地における「周縁」であったレイテ島において、日本占領下で、エリート間の政治的対立や貧困層との関わりと、抗日闘争・対日協力の軸が複雑に絡み合う様子を丹念に描き出した。戦後はアメリカ植民地期に確立したエリート層による支配構造が生き延び、「同胞に対する暴力」の罪を背負わされたのは概ね貧困層であったという構図は、フィリピン全域において共通するだろう。日本の占領統治への対応の中で、①エリートによる抗日闘争・対日協力双方への関与と派閥抗争、②エリートを中心とした組織と民衆を基盤とした組織の対立 (後者には抗日ゲリラと対日協力組織の双方がある)、③戦前からの反米思想に基づく対日協力、④経済的理由による貧困層の対日協力に加えて、本書は⑤日本占領を「利用」して経済的上昇を果たした新興エリート層がいることを明らかにした。

また本書は、エリート層だけでなく人口の多数を占める庶民や貧困層に焦点を当てることで、日本占領下のレイテ島という一つの地域社会を描いた、優れた地域史である。無学の貧困層の言葉は公的な記録としては残りづらい。加えて、戦後直後の裁判などにおいて「沈黙」が支配したレイテ社会について、丹念な資料調査とインタビューによってその地域像を本書は提示したのである。

フィリピン人がフィリピン人に対してふるった暴力を語ることは難しい。著者が指摘する通り、フィリピン社会はそのことに「沈黙」し、一部の対日協力者を断罪することで封じ込めてきた。評者自身も1990年代半ばにレイテ島でたまたま「日本軍のドライバーだった」と語る男性に遭遇し、そのために「裏切り者」として生きるしかなかった半生の苦しみを、戦後50年間で初めて出会った日本人に対する怒りとしてぶつけられたことがある。こうした人々が半世紀にわたってフィリピン社会の最下層であり続けたことは、戦前の植民地統治の帰結であるとともに、日本占領が残した結果である。著者が丹念な対面調査により彼らの証言を記録したことに敬意を表したい。

しかしながら同時に、資料考証の不足といくつかの概念の定義の曖昧さが、本書が描く占領下レイテ島をより広い構図に位置付けて理解することを難しくしているように思う。

たとえば著者が丹念に読み込んだ特別国民裁判記録や米国CICの報告は、そこに記録されている情報がどのような性質を持つのかを論じないと、フィリピン固有の状況が伝わりづらい。また、それらと著者が集めたインタビュー資料との関係も説明されていないため、インタビューが何を明らかにしたのかがわかりづらい。

概念の定義に関しては、「下位中間層」がどのような人々を指すのかが曖昧ではないか。「下位中間層」と「中小の地方経済エリート」や「新興ブルジョワジー／新興中小エリート」はどう異なるのか。また、「下位中間層」・「それ以下(の層)」と「貧困層」はどのような関係にあるのか。さらに、占領を通して「階級上昇した」町村長や蓄財した者は、戦後はどのカテゴリーに参入したのかなどが不明で、本書が取り上げた非エリート層がレイテ社会の階層構造にどう位置付けられるのかがはっきりしない。

また、本書では非エリート層の証言が随所で用いられているものの、いささか断片的である。たとえば、本書では「独裁的」な対日協力の指導者が住民の「厚い信頼」を得たと述べられているが(p.123)、住民はその指導者についてどのように語ったのか。著者の調査の実績を踏まえて、そうした下層の民衆から見た占領下のレイテ社会を彼らの言葉に基づいてより包括的に描いた研究を、評者は是非読んでみたいと思う。さらに本書では在レイテの華人、日本人、アメリカ人にも言及されており、日本占領下でアメリカ人企業家や華人が対日協力勢力などとも絡みながら活動が続いていた様子は興味深い。戦前から「周縁」であったとされるレイテ島の、このような社会のあり方がさらに解明されることを期待する。

最後に、本書の記述から浮かび上がるフィリピン・ナショナリズムの問題について触れたい。アメリカ植民地期に台頭したエリート層は概ね「自由と民主」・「近代」といった価値観をアメリカ人と共有し、その先に独立を志向した。この「近代」という価値観への同化を中野(2007)は「敗者のアメリカニゼーション」と呼び、芹澤(2012)はイゴロット・エリートの対日協力を論じた論稿で「抑圧と解放が同じ近代化という原理によって働いてしまうジレンマ」と評した。これを基底とする比米の関係は、戦後に「アメリカとともに戦った戦争」という物語を生み、対日協力は「裏切り」、貧困層の暴力は「野蛮」と見なされた。この主流のナショナリズムからは、WLGWFのカンレオンのような反米・反日・反地主層の思想は「反体制」や「山賊」と見なされ排除されたことが本書では述べられる。一方で本書は、レイテ島では「戦前からの反米思想」や「文化」に基づく「ビサヤ主義」が町村長など、すなわち著者の言う「下位中間層」にも根強かったことを指摘する。それらの思想は、占領下の行為としては対日協力に結びついたのか。またそこに、日米どちらと手を組もうとも、どちらの求める「フィリピン」にも与しないナショナリズムを見出すことは可能だろうか。このように、本書の分析が階層に焦点を当てたことで、階層ではとらえきれないフィリピン社会の思想状況も浮かび上がったように思う。

このようなフィリピン史研究の課題が導かれるのも、著者が収集した資料が日本占領下の一つの地方社会についての「厚い記述」を可能にするものだからであり、本書はその目的を超えて様々な議論を喚起する力を持つ。また、不足はあるものの、日本占領期の東南

アジア研究に反日／親日が錯綜する地方社会という像を提示し、マイクロストーリー的手法による日本占領期研究の意義を示した力作であると言えよう。

参考文献

池端雪浦編（1996）『日本占領下のフィリピン』岩波書店。

倉沢愛子編（1997）『東南アジア史のなかの日本占領』早稲田大学出版部。

芹澤隆道（2012）「フィリピン・コルディレラ山地社会の「アメリカ化」とイゴロットの対日協力問題」『東南アジア研究』50巻1号、109-139頁。

中野聡（2007）『歴史経験としてのアメリカ帝国——米比関係史の群像』岩波書店。

前川佳遠理（2009）「日本占領下東南アジア研究史」東南アジア学会監修『東南アジア史研究の展開』山川出版社、199-214頁。

■ 評者紹介

- ①氏名(ふりがな): 内山史子(うちやま・ふみこ)
- ②所属と役職: 都留文科大文学部比較文化学科准教授
- ③出身地: 群馬県
- ④専門分野・地域: フィリピン史、東南アジア地域研究
- ⑤学歴: 東京外国語大大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得のうえ、退学。
- ⑥職歴: 現職のみ。
- ⑦現地滞在経験: 長期滞在としては、大学院生の頃にフィリピンに通算1年半滞在。
- ⑧研究手法: 主として文献資料に基づく歴史研究。
- ⑨研究上の画期: 修士論文執筆の過程で遭遇した資料に導かれて、フィリピンの植民地期の研究に取り組み始めた時。
- ⑩推薦図書: 土屋健治(1991)『カルティニの風景』めこん選書2、めこん。